

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02718

研究課題名(和文) 現代日本語に観察される書体の多様性に関する社会言語学的、音声学的研究

研究課題名(英文) Sociolinguistic and phonetic study on the diversity of script styles in Modern Japanese

研究代表者

岡田 祥平 (OKADA, Shohei)

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：20452401

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：現代日本語の文字言語に観察される書体(フォント)の多様性の背景の一要因として、書体には語用論的な効果を伝える役割・機能やパラ言語情報と非言語情報を伝える役割・機能があるのではないかという結論を見出した。また、本研究課題に関連する現代日本語の動態についての研究も実施するとともに、小学生にその研究成果を伝える授業を行うなど、学術研究の世界にとどまらない形で研究成果の発信を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

普段、誰もが日常生活で親しんでいるテレビやインターネット動画で観察される書体の多様性の理由を言語研究の立場から整理した点は、現代日本語の動態を整理したという学術的意義は勿論のこと、社会や国民が言語研究の魅力、面白さに気づききっかけとなると同時に、日常生活の何気ない事象であっても専門的な立場から検討することで当該事象が生起する理由を整理できるという、言語研究の存在意義を伝えることができるという点で、一定の社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Considering the factors that contribute to the diversity of script styles (fonts) in written Modern Japanese, it has been concluded that fonts are capable of conveying pragmatic effects and functions related to sociolinguistic and paralinguistic information. In addition, studies on the variations and changes in Modern Japanese related to this research project have been conducted. Furthermore, efforts have been made to disseminate their findings beyond the academic realm, such as conducting classes to educate elementary school students on the research outcomes.

研究分野：日本語学

キーワード：書体 フォント パラ言語情報 非言語情報 語用論的機能 新用法 ステレオタイプ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

現代日本語の文字言語を観察していると、実に様々な書体が使用されていることに気づく。すなわち、現代日本語の音声、語彙、文法、文字・表記と同様、現代日本語の文字言語における書体にも、多様性が存在しているのである。

現代日本語の文字言語における書体の多様性に関しては、デザイン関係の経験や知見が参考になる。当該分野の経験や知見としては、現代日本語の文字言語で使用されている書体はそれぞれ異なる印象を読み手に与える特性を持っているゆえ、それぞれの書体が持つ特性を踏まえつつ、書体を使い分けることの重要性が指摘されている(たとえば、筒井 2015 など)。つまり、現代日本語の文字言語に観察される書体の多様性は、それぞれの書体が持つ特性を駆使して、読み手に「何か」を伝えようとした結果、生じたものだと考えられるのである。

では、現代日本語を表記するそれぞれの書体はどのような特性があり、読み手にどのような印象を与え、読み手に「何を」伝えることができるのであろうか。この点については、上述した通り、デザイン関係の世界では一定の共通理解が存在しているようである。しかしそれらは個人の経験や感覚に基づいて説明されており、当該分野以外の人間にとっては共通理解に達することは必ずしも容易ではない。また、文字は音声言語を視覚化する手段で、言語研究の対象でもある以上、上述したような問いについて、言語研究の立場からの考察を試みることに、充分価値があると考えた。

実際、現代日本語の文字言語に観察される書体の多様性に関する言語学的研究、あるいは日本語学的研究は、近年になって散見されるようになった(たとえば、定延 2005、金田 2012 など)。しかし、それらの研究は、ビジネス文書にふさわしい書体は何かという問題提起から書体が読み手に与える印象を論じたもの(定延 2005)や、マンガのセリフを例に書体が読み手に与える印象を論じたもの(金田 2012)である。それらは、いわば“「文字」から連想される印象”を考察するという観点から、現代日本語を表記できるそれぞれの書体はどのような特性があり、読み手にどのような印象を与え、読み手に「何を」伝えているのか、という考察を試みている研究といえる。

## 2. 研究の目的

現代日本語の文字言語に観察される書体の多様性の中には、「1. 研究開始当初の背景」で紹介した先行研究のアプローチではその特性を充分捉えきれないものがあるのではないかと考えた。その典型例が、「テレビの字幕」である。テレビの字幕の多くは「音声化された日本語」の一側面(=口調など)を「文字」に反映させた結果である。すなわち、テレビの字幕は「音声化された日本語」がまず存在して、そこに文字が付随するという、いわば「音声の主、文字が従」という関係性なわけであるしたが、テレビの字幕に観察される書体の多様性は、「音声化された日本語」との関係性を必ず考慮しなければならなくなる<sup>1</sup>。すなわち、現代日本語の文字言語に観察される書体の多様性の中には、先行研究が指摘したような“「文字」から連想される印象”を考察するというアプローチだけでは十分に考察しきれない現象があるのではないかと、いうことである。

テレビの字幕は、いわば“「音声」化された日本語が先にあり、それに「文字」を与えたもの”である。それゆえ、テレビの字幕に観察される書体の多様性を考察することは“「音声」化されたから連想される印象をどのように「文字」化しているのか”を考察することにつながり、現代日本語の文字言語に観察される書体の多様性を言語学的、あるいは日本語学的に考察するためには重要だと考えられるのである。

そこで、本研究は、松田(2015)も参考にしつつ、“「音声化された日本語」から連想される印象をどのように「文字」化しているのか”というアプローチ、特に現代日本語の文字言語に観察される書体の多様性は何らかの音声的特徴を「文字」に反映させようとした結果であるという発想に基づき、現代日本語の文字言語に観察される書体の多様性の要因を主に社会言語学的、ならびに音声学的に明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 他分野(特にデザイン関係の分野)の知見の整理

現代日本語の文字言語に観察される書体、フォントの多様性を社会言語学的、ならびに音声学的観点から分析、考察するにあたっての観点を探るべく、他分野(特にデザイン関係の分野)に

<sup>1</sup> もちろん、「1. 研究開始当初の背景」で紹介した先行研究の中には「音声化された日本語」との関係が考慮されているものも少なくないが、「テレビの字幕」のように「音声化された日本語」が文字に先行する例を扱っているわけではない。たとえば、漫画のセリフの書体を対象にした研究の場合、音声との関係性を考慮することが必須であると思われるが、漫画のセリフは実際に「音声化された日本語」を文字化したものではない。つまり、漫画のセリフには「音声化された日本語」は付随していないのである(読者の心内でセリフの音声がなされるかもしれないが)。その点が、ほとんどの場合「音声化された日本語」が存在するテレビの字幕と異なるわけである。

おける書体，フォントに関する書籍，文献を収集し，関連する知見の（再）確認を行った。

(2)「発話音声を中心とした文字化したテレビ番組やインターネット上の動画の字幕」の用例データベースの構築

「2. 研究の目的」で述べた本研究の課題を達成するために、「発話音声を中心とした文字化したテレビ番組やインターネット上の動画の字幕」の用例データベースの構築を試みた。その際、テレビ番組や動画の音声の音響分析を可能にすることを意図したことから、背景音（BGM など）や発話の重なりがない部分を抽出するよう配慮した。

#### 4. 研究成果

(1) 他分野（特にデザイン関係の分野）における書体，フォントの知見について

デザイナーやイラストレーターによる書体やフォントにかんする知見は、視覚（ビジュアル）情報と書体，フォントの関係性は勿論、音声言語の諸特徴と書体，フォントの関係性についてもある程度まとめられていた。ただ、「個人的な感覚」によって整理、また、「音声言語の諸特徴」が主観的、日常的な表現を用いて記述されているため、デザイナーやイラストレーターが認識している「音声言語の諸特徴」と書体，フォントの関係性の知見の内実について、音声学的な側面についてはやはり詳細が判然としないもの少なくなく、また、その感覚が日本語使用者に広く共有されているか否かについては判然としなかった。しかし、デザイナーやイラストレーターが指摘する視覚（ビジュアル）情報と書体，フォントの関係性は、本研究を遂行する際の分析の観点として、大きなヒントを得ることができた。

(2)「発話音声を中心とした文字化したテレビ番組やインターネット上の動画の字幕」の用例データベースに基づく分析

現代日本語の文字言語に観察される書体の多様性について、(1)で述べた経緯から導き出された観点から社会言語学的、ならびに音声学的に明らかにすべく、「発話音声を中心とした文字化したテレビ番組やインターネット上の動画の字幕」の用例データベースの構築を試みた。ただ、諸般の事情により、研究計画を立てた際に予定していた研究協力・補助者にデータベース構築の作業をお願いすることができない事態となった。また、そのような事情により、研究期間の延長をしたのであるが、特に延長した期間の1年目と2年目は新型コロナウイルス感染症のパンデミックの時期と重なり、所属機関の方針もあり対面での研究活動の遂行が制限された。さらに、「3. 研究の方法」の(2)で述べたような条件（音響分析を意図したことから背景音（BGM など）や発話の重なりがない部分を抽出する）でデータベースを構築しようとした結果、作業時間と比較してデータベース化できる用例が十分に確保できなかった。

以上のような事情から、独自のデータベースの構築と並行して、各種音声コーパスに格納されている音声をどのようなフォントで文字化するかという試みも行った。しかし、適切な方法論を見出すことができず、満足の行く形で研究を進めることができなかった。

結果として小規模な用例に基づく考察しか行えなかったが、現代日本語の書記言語に観察される書体（フォント）の多様性の背景の一要因として、書体には以下のような役割・機能があるのではないかという結論に達した。

語用論的な効果を伝える役割・機能

パラ言語情報と非言語情報を伝える役割・機能

の役割・機能は、談話展開上、強調を施したい要素について、前後の要素とは異なる書体で表すものである。この役割・機能は、音声言語が付随するテレビの字幕のみならず、音声言語が付随しない一般的な文字言語にも観察されるものであるが、研究計画を立てた時点では、テレビの字幕における書体の多様性を支えるものの中に、このような役割・機能があるとは想定していなかったものである。

一方、の役割・機能は、前後とは異なる音響的特徴で発話された要素について、前後の要素とは異なる書体で表すものであり、音声言語が付随するテレビの字幕特有のものであるといえる（ここに、音声言語と文字言語とのインターフェイスを見出すことができる）。さらに、の役割・機能は、有標的な音響的特徴を持つ発話に加え、（きわめて）特徴的な「キャラクタ」を有している発話者の発言を文字化したテレビの字幕に認めることができた。

(3) 研究計画段階では予測し得なかった事態に応じた、本研究課題に関連した研究成果

新型コロナウイルス感染症の流行下でも遂行可能な研究の模索

COVID-19 の蔓延が終息しない、いわゆる「コロナ禍」の状況でも遂行できる本研究課題に関連した研究活動を模索した。その結果として、以下のような研究成果をまとめることができた。

- ・ポスターなどを掲載したオンラインデータベース（「阪急文化アーカイブズ」）を利用した研究の可能性の模索（ポスターには多様な書体が使用されている）

- ・(2)で述べた用例データベースを作成する際に気付いた、意味・用法の拡張・新用法にかんする研究

- ・SNS における表記の多様性に関する論考（ただし、本研究の期間内には公表できなかった）

(4) 一般への研究成果の発信

(2)や(3)で述べた研究成果の一部を、複数の小学校での「出前授業」や一般市民を対象にした市民講座で講じることができた。これは副次的な成果ではあるが、小学生や一般市民にとっては身近な存在だと考えられるテレビの字幕を題材に研究成果を広く社会や国民に伝えるという点で、重要な研究成果（研究活動のひとつ）だと考える。

#### 参考文献

- 金田純平 (2012) 「文字表現の音声学」 定延利之 [編著] 『私たちの日本語』 朝倉書店
- 金水敏 (2003) 『もっと知りたい! 日本語! ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店
- 定延利之 (2005) 「話しことばと書きことば(文字編)」 上野智子・定延利之・佐藤和之・野田春美 [編] 『ケーススタディ 日本語のバラエティ』 おうふう
- 筒井美樹 (2015) 『なるほどデザイン 目で見て楽しむデザインの本。』 エムディエヌコーポレーション
- 松田真希子 (2015) 「パラ言語としての文字音声コミュニケーション」 『研究集会「日本語音声コミュニケーション研究のこれまでとこれから」予稿集』

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 岡田祥平	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 「爪痕(を残す)」の「新用法」に関する覚書 国語辞典の語釈の変遷の詳細と、岡田祥平(2021)以降の動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 岡田祥平・正木義勝	4. 巻 -
2. 論文標題 「阪急文化アーカイブズ」を利用した日本語研究 / 言語景観研究の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語資源活用ワークショップ2020発表論文集	6. 最初と最後の頁 85-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00003148	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 岡田祥平	4. 巻 38(4)
2. 論文標題 一語からはじめるSNSのことばの研究 SNSの「特性」と先行研究から、その可能性を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 56-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岡田祥平	4. 巻 12(2)
2. 論文標題 SNSを日本語研究資料として利用するための覚書 『日本語学』2019年4月号掲載の拙論に対する補遺として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 163-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岡田祥平・正木喜勝
2. 発表標題 「阪急文化アーカイブズ」を利用した日本語研究 / 言語景観研究の可能性
3. 学会等名 言語資源活用ワークショップ2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡田祥平
2. 発表標題 鮎川哲也『ペトロフ事件』に観察される, 旧満洲地域における「日中ビジン」
3. 学会等名 日本語学会2020年度秋季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡田祥平
2. 発表標題 『ペドロフ事件』に描かれた, 1940年代の旧満州地域における多言語状況
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第6回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡田祥平・中井好男・八木真奈美
2. 発表標題 (パネル発表) 日本における「多言語」の表層と深層
3. 学会等名 ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡島昭浩・浅川哲也・岡田祥平・島田泰子・新野直哉
2. 発表標題 (シンポジウム)日本語の先端的な動向の解明と、そのための新しい資料論
3. 学会等名 日本語学会2018年度秋季大会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Twitterへの投稿の実態 教材化の可能性と必要性を考えるために
2. 発表標題 岡田祥平
3. 学会等名 「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発(略称:状況研)第4回公開研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 現代日本語における書体の多様性が意味すること - テレビの字幕から考える -
2. 発表標題 岡田祥平
3. 学会等名 第52回メディアとことば研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田祥平
2. 発表標題 「母語」を相対化する愉しみ~現代日本語研究への誘い~
3. 学会等名 Niigata Liberal Arts Club
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡田祥平
2. 発表標題 Twitterで観察される新しい「命令」「禁止」表現
3. 学会等名 社会言語科学会第47回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 国語語彙史研究会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 386
3. 書名 国語語彙史の研究 四十一	

1. 著者名 金澤 裕之、川端 元子、森 篤嗣	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 日本語の乱れか変化か	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------